連載■農と食の現場でPART11

北の大地に根を張る新規入植者たちの心意気

ルポライター 滝川 康治

行政などのさまざまな支援策も手伝って、農業以外の分野から新規入植する人が少しずつ増えている。そうした人たちの生活ぶりと農業に対する見方を、道東の酪農地帯で聞く。

脈打つ「農援隊」の精神

別海町中西別にある今井牧場の入口には、「農援隊」と刻んだ看板が掲げてある。「農業の世界から日本を援護したい」と、主の今井眞人さん（46）が学生時代、仲間3人で坂本竜馬の「海援隊」をもじって結成した名残だ。飼育牛には、頭文字の「N」を必ず入れてきた。仲間はそれぞれの人生を歩んでいるが、牧場経営のなかに「農援隊」の精神が着実に脈打つ。

神奈川県生まれの今井さんには、母親の手ひとつで育てられた少年時代、裕福な家庭の軒先に並ぶ牛乳をふんだんに飲んでみたかった思い出がある。畜産関係の大学に進んで、1年生のときに隣の中標津町の牧場へ実習に入り、カルチャーショックを受けたのが酪農との出会いだった。

「好きな道において世界を開いていくという竜馬の言葉が好きなんですよ。畜産は狩猟民族の遺産だし、食を作る豊かさがある。最初は岐阜の山奥でアルペン酪農をやりたかった」

と振り返る今井さんが、「農援隊」の仲間とこの地で酪農を始めたのは74年のこと。〝元祖　新規入植者〟といってもいいだろう。

静岡県生まれで同じ大学の後輩だった妻のみさよさん（37）は、町内の別の農家へ実習にきていた。

「友人に手を回して、自分のところへ実習に来させた」（眞人さん）という努力の甲斐あって、77年には大学を中退したみさよさんと晴れて結婚。「知識がないのは怖くないんですね。でも、本州で結婚式が終わり、すぐに車で走って帰ってきたら、山のような仕事が待っていました」（みさよさん）

今井さん夫婦は、新酪農村事業に参加して営農をつづけてきた。途中で別の1戸分の土地を取得して、今は120haの農地で200頭余りの乳牛（うち110頭ほどが経産牛）を飼う。小学生から高校生まで5人の子供がいて、全員が牛舎の仕事を手伝う。

「農援隊」の看板の前で、新規入植の元祖的存在の今井さん一家

エゾシカに学ぶ牛飼いを

8年ほど前に厚岸産のトドマツで建てたログハウスに住む。居間には大きな薪ストーブが据えられ、坂本竜馬のパネル写真や薬莢（やっきょう）、ルアーなども飾られている。眞人さんは冬のふた月間、山野にエゾシカを追う。この趣味のシカ猟、酪農とも深い関係がある。

「シカは母親の乳を飲みながら、60種類の野草を食べ、穀物を皮下脂肪に蓄えて、そういうサイクルで酪農を考えたらどうか。『酪農はエゾシカに学べ！』なんだよ。根釧原野は、畑作が挫折するなか反芻動物を導入して自給自足を確立しようとしたけど、輸入穀物に頼ってしまった。「健土健民」の黒沢哲学を忘れているんじゃないか」

持論を展開する今井さんがこだわるのは、かつて訪れたニュージーランドの酪農だ。1頭当たり乳量は少ないが、粗飼料を中心に自然のサイクルを利用した飼い方に魅力を感じるという。

「これからはミミズのたくさんいる畑を作り、購入飼料に依存しない形にしたい。粗飼料中心で飼う〝根釧エゾ谷地牛〟がいていいんじゃないか」

と強調する。今井牧場では、ジャージー種の雄牛を入れて自然交配を行い、放牧すると低下する牛乳の脂肪分を上げてきた。もう8年ほど、牧草地に化学肥料を撒いていない。根室の風土に合った牛づくりと営農を追求する、独自の試みである。

「作物をつくり、自給自足のような生活ができればいいな、って思っていたんです。農繁期、牧草畑にホカ弁を配達してもらう家まであるけど、うちは（野菜畑に）草ぼうぼうだけど、ある程度自給してます」（みさよさん）

と、忙しさのなかにも農民としてのゆとりを忘れない。

「農援隊」から始まって20年余り、近代化路線の頂点を行く新酪農村のなかで、個性的な生き方が光る。

山や川のある生活を求めて浜中町に入植した服部さん夫婦

原風景の世界を求めて

浜中町厚陽の服部宗一（48）紀志子（49）さん夫婦は、5年前に「農場リース事業」を利用して新規入植した。毎日、バルククーラーから搾りたての牛乳をすくって飲める生活にすっかり魅了されている。

三重県生まれの服部さん夫婦にとって、北海道は「山や川のある原風景の世界」に映った。宗一さんは、地方公務員を10年やったあと、埼玉県内の自動車会社で配送業務などに従事したが、「原風景のある暮らし」に思いが募った。そんな生活を求めて全国各地を歩いたこともある。

84年早春、服部さん一家はフェリーで東京をたって釧路をめざした。「畑つき住宅」を探し、1か月後に厚岸町糸魚沢（いざわ）で借家を見つけて落ちつく。羊や鶏を飼い、畑を作り、念願の自給自足に近い生活。宗一さんは運送の仕事などをしながら生活費を稼いだ。「埼玉時代の収入の半分以下になったけど、最高の生活」（紀志子さん）が4年間つづいた。

16頭にまで増えた羊が取り持つ縁で浜中町の農協関係者と知り合い、88年夏、「農場リース事業」を利用して現在地へ入植した。思いもかけない牛飼い人生への転換だった。

入植したものの素人の悲しさ、指導に沿ってたくさんの牛乳を無理に搾ろうとした結果、牛の病気や労働過重に悩まされた。望んだ暮らしと正反対の味気ない展開に、服部さん夫婦は「こんな酪農ならやめようか」と話し合った。そんななか、別海町の「マイペース酪農学習会」（2～3月号の本連載を参照）に参加したのがきっかけで、一挙に経営を転換。宗一さんは今、浜中の同学習会の事務局を支える。

「この出会いがなかったら、酪農をやめてどこかの町で働いていたと思う。

「ムツゴロウ王国」に憧れて北海道にやってきた酒井さん夫婦

リース牧場は素人が農家になれる選択肢を拡げてくれたし、与えられた条件のなかで居心地のいい形に換えればいい。幸い、浜中農協はその手だてをきちんと取ってくれた」

「農場リース事業」は、離農する酪農家の土地や施設などを(財)北海道農業開発公社が一括取得して、新規就農者などに貸し付けた(5年以内)のちに売り渡すことで、負債整理と担い手育成の一石二鳥を果たそうとする制度。82年度に道単独事業として始まり、89年度からは国の事業に移された。

同公社によると、昨年度までに根釧・天北両地区を中心に約110戸がこの制度で入植しており、うち8割ほどが新規就農者で占めるという。両地区では毎年、就農者の交流会も開かれる。浜中町内には9戸のリース牧場があり、服部さんは4番目の入植者。リース牧場、浜中農協の研修牧場を合わせると新規就農は13戸、家族を入れると総勢50人ほどに達する一大勢力だ。

昨年、服部さんは牧場を買い取った。18年償還で毎年の元利合計額は320万円。数年後に本格償還期を迎えるが、所得率は上がっており、返済についてはそう心配していない。

現在は乳牛38頭(うち経産牛32頭)を飼育中。建物は古いが牛床はいつも清潔に保ち、牛乳の細菌数は極めて少なく、味には自信がある。羊と鶏も少し飼っていて、紀志子さんは糸紡ぎが得意だという。

「コンビニはないけど、生き物や植物と触れ合えるのがここの魅力。それに沿った酪農を考えればいい。消費者との交流はチャンスが訪れればやっていきたいけど、基本的には(消費者が)現場を見て、うちの牛乳を直接飲んで一緒に語ってほしい」(宗一さん)

「婦人部の集まりでタンチョウの話がすんなり出てくるのが農業の一番の良さ。(農外の人に)来てもらって、触れてもらうことが大事だと思う」(紀志子さん)

田舎暮らしを楽しみ、周りの農家の知恵に学ぼうとする服部さん夫婦が消費者に送るメッセージである。

優等生からマイペースへ

服部さんの近所で乳牛57頭(うち経産牛37頭)を飼う酒井裕一(37)弘美(32)さん夫婦は、89年秋に入植したリース牧場の第5号目だ。

大阪城を見ながら育った裕一さんは、子供のころから畑正憲さんの「ムツゴロウ王国」に憧れていた。大阪では生協に勤めて配達や企画部門などを担当していたが、87年に町内の牧場へ実習に入り、念願の浜中へ移り住んだ。「大草原の小さなわが家」のイメージに夢を抱いたのだという。

鳥取県の畑作農家に育った弘美さんは、両親の苦労する姿を見て、「農家にだけは絶対に嫁に行かない」と思ってきた。大阪で結婚、共働きをしながら子育てをしていたが、「あれよ、あれよという間に言いくるめられて、嫌いな農家をやることになってしまった」(弘美さん)らしい。

入植したふたりは、酪農家の〝優等生〟をめざした。人間が牛に合わせて仕事をして、乳量アップに血道をあげた結果、ギスギスした生活になってしまう。そんな生活が2年間つづき、何のために北海道にきたのか自問するようになった、という。

やがて服部さんらに触発されて、牛を減らして「マイペース酪農」へと転換。経営内容も好転し、最近は浜中での生活をごく当たり前に楽しめるようになった。男の子がふたりいて、地域の人たちも喜んでくれた。

「農業は大嫌いなはずだったけど、自分が花壇や野菜を作ったり、牛の世話をしていると、心が落ちついて喜びを感じるようになってきた。両親が農業を捨てなかった理由が初めて分かったような気がします」

2月に町内で開かれた「これからの酪農を考える学習会」で、弘美さんはこんな発表をした。裕一さんは、

「テレビを見る時間が減って、話をするのが増えてきた。それが僕らの進歩だと思う。今のスタンスを壊さないで農場や生活の力を深めたいし、農業をつづけるなかで解脱できればいいね」

と言ってのける。描いた夢に少しずつ生活が近づいているようだ。

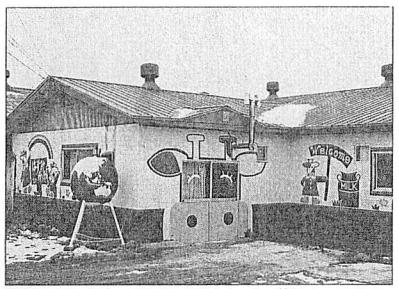
自然体で酪農つづける

中標津町西竹の蓮見成尋(30)早苗(29)さん夫婦は、ごく自然に道東に落ちついた。これまでの3組とは違って、北海道に対する思い入れは少ないように見える。

地元の焼き物で作った看板の前に立つ中標津町の蓮見さん夫婦

東京生まれで動物好きだった成尋さんは、中学時代には牧場をやりたいと思っていたとか。親の反対を押し切って都内の農業高校に進み、休みには十勝の牧場で実習していた。学生時代には、脱サラして中標津町内で牧場を営んでいる親戚のところへ通った。87年に卒業してからの4年間は、町内の別の牧場でじっくり学んだ。

横浜出身の早苗さんは大学の同級生で、90年に結婚した。定住の地を求めて近隣の農協を訪ね歩いていたが、翌91年春にちょうど離農跡地が見つかり、「農場リース事業」を利用して現在地に入植している。


蓮見牧場の牛舎には漫画が描かれて、道行く人の目を引く

「牧場は北海道にこだわっていなかった。そのへんが変わっているのかな。高校時代からひんぱんに来ているので感激が薄いのかもしれない。周囲には知人や同年代の人もいて、違和感はありません」(成尋さん)

「寒いのは苦手だし、わたしも特に北海道じゃなくても良かったんです。ここは昭和初期から戦後にかけての入植地で、みんなが2代目という土地柄もあって地域にも溶け込みやすかった」(早苗さん)

と口をそろえるように、肩ひじが張っていない。3歳と1歳の男の子がおり、子供たちには北海道でしかできない生活をさせてあげたい、という。

前の実習先ではトラクター部門や営農計画などを任されていたので、それなりに自信をもっていたが、いざ独立してみると違った。買い集めた牛たちは集団行動が苦手で牛舎に戻ってくれなかったり、他人の話をつまみ食いした営農で心身ともに疲れたり……。人真似じゃなく、信念をもって自分のやり方で営農に取り組むことの大切さに気づくのに2年を費やした。

現在は40haの土地で乳牛約80頭(うち経産牛が半数)を飼うが、「高乳量がひとつの目標で、見栄えのいい牛をつくりたい」(成尋さん)と意欲を見せる。

昨年、牛舎の外壁を塗り替えるときに、後輩の女性実習生と一緒に漫画を描いてみた。道内各地をクルマで走るが、わたしはこんな牛舎を初めて見た。どことなくユーモアがあって、道行く人の目を楽しませてくれる。蓮見さん夫婦の気持ちにゆとりができてきた表れでもあるのだろう。

……

ここで紹介したのは、酪農就農者群像のごく一端である。

「リース牧場」に限っていえば、定着率は9割ほど(道農業開発公社の話)という。自然に親しむ暮らしを満喫する人、大規模酪農や新技術の導入に情熱を燃やす人、個体改良を追求する人などと、それぞれの持ち味で多様な営農を築いている。きびしさばかりが強調されがちな本道酪農だが、新天地に夢を求めて、したたかに生きる姿がそこにある。

連載■農と食の現場でPART12

北の大地に根を張る新規入植者たちの心意気

その二

ルポライター
滝川　康治

酪農編につづいて、北海道へ移り住んで新しい生活を模索する人たちの話を聞く。有機農業をベースに農村の良さを追求する人、ハーブや花づくりに挑戦する人――。道央圏での営みを紹介する。

農村生活の豊かさ満喫

「農業は奥が深いし、引きつけるものがあるんだ。毎年、気候も違うし、土も変わっていく。植物が考えているとしか思えない場面にもぶつかる。妙なるものを感じますよ。農業は芸術だなあ、ってね。とくに瓜類は絶妙だよ」

13年前、積丹町婦美に新規入植して、いまは4haの畑にジャガイモやカボチャ、ダイコン、メロンなどを無農薬栽培している高野健治（44）さんは、農業の魅力を淡々と語る。

町内の酪農家から買ってきたふんだんな堆肥を、畑に還元しつづけて土を肥やしてきた。「ここ2～3年のうちに全面積を化学肥料なしでやれる目処がついた」と、自信をのぞかせる。

妻の育子さん（37）は、農家の主婦らでつくる「花織里会」のメンバー。夏はルバーブなどのジャムづくり、冬場は羊の毛紡ぎや織りを楽しむ一方で、ドライフラワーの講習会も開く。

「豊かな素材を活かした暮らしをしようって、結成して4年になるけど、押し花は近所のおばあちゃんたちに拡がってきたし、講習会も定着してきてるんですよ」（育子さん）

一家は乳製品や味噌、ケーキなどを手作りする。小麦や大豆は自給し、牛乳は近所の酪農家から分けてもらう。健治さんは、訓子府町のホクレンチーズ研究所で研修を受け、カマンベールチーズをマスターしている。

「世界に1枚しかないものですよ」

と、ふたりから押し花入りの名刺をもらった。健治さんの肩書は「百姓」。育子さんの名刺の「自然の素材でまちおこし」という会のキャッチフレーズが目を引く。農村の良さを満喫しているから、ライフスタイルを都会に近づけようなんて思わないのである。

小樽出身の健治さんは、71年に大学を卒業後、中近東やヨーロッパを旅した。そのなかで、イスラエルの農村共同体「キブツ」で生活した3年間が、農業に関心をもつきっかけだった。

ハーブのひとつ、オレガノを手にできる具合を話し合う大滝村の山際さん夫婦

長年の有機農業に自信

75年に帰国して間もなく、「阿寒学園村をつくろう！」という教育大の先生の呼びかけに応じて鶴居村へ。移住者同士が集まって、子供たちに田舎暮らしを体験させる共同体の構想だったが、見通しの甘さから挫折する。岩手県出身で教育大生だった育子さんとは、ここで知り合って結婚した。

借地して自給自足の暮らしをする一方、酪農家でアルバイトをする生活が3年間。鶴居村への定住も考えたが、酪農をやるには資金がかかりすぎるので、炭鉱やビート工場などで稼ぎながら、入植資金を貯めることにした。

81年に現在地へ移り住んだ。

「ブラジルでもどこでも良かったんだけどね。ここは土地の値段が安かったから決めたんですよ」（健治さん）

初めから有機農業を志向してきた。無農薬で売るのは難しい時代に仲間たちと北海道有機農業者会議をつくった、この分野では草分けのひとり。「らいでんスイカ」を生み出した普及員から教えを受けたことも幸いした。

そんな着実な歩みがあるので、昨今の有機農業ブームには疑問が多い。

「有機農産物を差別化商品と思っている農家がいる。僕は、洗いダイコンやハウスミカンを例に、『みんながやりだすと差別化商品でなくなるよ』って言うんだ。高く売りたい一心で消費者におもねたんじゃ、農家は豊かにならない。基本を見据えないと、一時しのぎのアブク銭になるんだよ」

と警告する。冬の間、八百屋の車に同乗してみるが、花粉症やアトピーの問題など、買う側の事情があるのが分かる。野菜を買いにくるグループには、「畑を見ながら考えましょう」と語りかける。農民としての誇りが伝わってくる話である。

積丹町には、10戸近い新規就農者がいる。農業を志す若者もよく訪れるが、いつも「自己資金を用意しておくといいよ」と助言する。温厚な人柄と筋の通った農業哲学をもった人だけに、まわりの信望も厚いようだ。

「農業の一番の強さは自給的な部分。それに立脚して考えたら、これほど強い仕事はない。将来は労働時間をいまの半分にして、悠々食べていけるといいね。規模を縮小して、技術で勝負できるスイカやメロンを中心にしたい」

と意欲をのぞかせ、次のステップを踏もうとする。

糸紡ぎや豊かな素材を使った食品づくりも楽しむ積丹町の高野さん夫婦

ハーブを軸に積極経営

大滝村上野に住む山際輝彦（40）千栄（39）さん夫婦は、6年前に大阪から移り住んだ。ハーブ栽培を手がける一方で、加工品づくりにも取り組む。

大阪生まれのふたりは、大学の応用科学科の同級生。機械設計の仕事をしていた輝彦さんは胃の病気を患っていた。87年、「宮仕えはやめたほうがいい」と、医者から宣告される。

一家の先行きを相談しあった。千栄さんには、自宅近くの植物園でハーブ栽培のボランティア経験があった。5年間、ハーブに関するさまざまなノウハウを教わっていたのである。

「週末農家でハーブを作り、減収分のカバーを」と考え、近隣の県で土地を探すが不発に終わる。そんななか、

「北海道や信州はハーブに向くよ」

と、知り合いの学者から教えられて、88年5月、千栄さんは子供たちとの旅行がてら、北海道にやってくる。まず、新得町で土地を物色した。

「農地法があるなんて知らなかったし、不動産屋で扱ってると思った」

全くの無知だったが、そこは関西人のたくましさ、無手勝流で農協に飛び込んだりして、聞いてまわった。

その後、雑誌で北海道農業会議（各農業委員会の上部団体）の存在を知り、入植先探しを依頼する。連絡を受けた翌月、再び来道して紹介されたのが現

山際さんは加工場も建設した。長イモなどを使ってパンをつくる

在地。まわりに林もあり気に入る。その夏には家族全員が移住した。

ハーブの知名度はゼロに等しく、近所の人は、「ハブを飼うんだって?」。役場の課長が間違って言って歩いたのが原因らしかった。

「そういうのって楽しい。思いっきり笑っちゃった」(千栄さん)

いつ逃げ出すかと周囲から見られていたし、ふたりには肉体労働はきつかった。近所の人の真似をして朝4時に起きて働き、昼前に畑にゴザを敷いて横になって、目が覚めたら夕方だったという失敗談も聞かせてくれた。

2年目は、取り寄せた種でハーブをともかく試作し、実験農場の様相を呈した。ハーブティーを購入する約束だった大阪の店が倒産し、製品が宙に浮くアクシデントもあった。

ホテルへの営業を念頭に、90年にはフレッシュハーブに転換する。千栄さんがホテルの調理人を訪ねたところ、食べ物の話題で盛り上がり、「まずサンプルを持ってこいよ」となった。人気ハーブにこだわらず、北海道の気候に適した良質のハーブを届けたのが評価されて、取引が定着していった。

私設研修センターが夢

現在は、1haほどの畑の半分に30種類ほどのハーブを栽培し、残りはサクランボなどの果樹、西洋料理に合う野菜類を作る。

2年前に3千万円を投じて住宅のそばに建設した加工場では、ハーブクッキーや地元の特産物を使った天然酵母のパン、長イモのつけ合わせなどを製造する。これらの製品は、村内の物産店や室蘭の生協のほか、札幌や東京などで販売中だ。受託加工や高校生の実習も受け入れている。加工部門は「はあぶの里」という有限会社にしており、千栄さんが代表を務める。

「6月から都会向けの通信販売も始めたんですが、これを充実させて流通が確保できたら、村外の人たちともリンクしてやっていきたい」

と、販路拡大に意欲的である。

輝彦さんは、とうや湖農協青年部の大滝支部長、千栄さんは同婦人部の支部長を務めているが、

「農協が加工をやってるけど、ジャムとジュースに集中している。独自の加工技術が決め手なのに軽視してるし、金をかければいい、という発想が目立つ。食べ物へのこだわりを理解していない。視察にしても、庭先で事情を聞いて有意義なものにしたらどうか」

「販売能力が不足しているし、『古くからいる』『耕地面積がある』との理由だけで役員を選ぶことが問題だ」

と、なかなか手厳しい。

山際さん夫婦は、道内への移住希望者を支援する「私設・北海道開拓使の会」のメンバーでもある。長男の成時さん(留寿都高校農業科3年)は、ふたりとも農業志望というから心強い。

そんな一家にとって目下の目標は、新規就農をめざす若者の研修センターを敷地内につくること。

「農業をやると言っている子供たちの仲間づくりのためにも、プレハブでいいから空間をつくりたい。会社を1週間〜1か月でも休んで、農業がやれるかどうか判断できる場になればいい」

と構想を練り、夢を拡げる。一家の存在は周囲のいい刺激になっているようだし、これからが楽しみである。

花づくりに挑戦して

月形町南札比内の我妻耕(34)由貴子(32)さん夫婦は、4年前に東京から新規入植して、小面積で収益性の高い花づくりに挑戦している。

都会の真ん中で育った耕さんは、父親の影響もあって中学時代から登山を始め、「田舎に住みたい」という漠然とした気持ちを抱いていた。農業への関心は進路選びに表れて、80年には酪農学園大学へと進んだ。

卒業後は、東京にある農業関係の出版社に就職し、学生時代に知り合った浦臼町出身の由貴子さんを呼び寄せてゴールイン。出版社時代の最初の仕事は、東海・近畿地区で農業雑誌の営業をすること。2年間、農家回りをつづけるなかで、「自分もやってみたい」という思いが募っていったという。

「営業しながら、いろんな話が聞けて面白かったし、『自分はこんな農業をやるんだ』という人と出会って力づけられましたね」

東京に戻り、実家の建て替え話がすすんでいた89年、「この機を逃したら就農できなくなる」と思い、母親と由貴子さんを前に決意を話したという。

「東京で暮らす心構えで行って、慣れてきたところだったので、いきなり言われてびっくり。でも、子供を預けて共稼ぎをするのは、『どうかなぁ』とも思ったんです」(由貴子さん)

カスミソウを栽培しているハウスのなかで月形町の我妻さん夫婦

結局、北海道で土地探しをすることに決め、由貴子さんのってで、月形町の農業委員をやっていた人に手紙を書くことにした。トントン拍子で話がすすみ、90年から土地を借りて花の栽培を始める。翌年には現在地を取得して、自営農民になった。

現在は、水田1・8haとカスミソウやナデシコなどの花卉0・6haを作付けており、国道脇の農場には7棟のハウスが並ぶ。出荷の前日は夜遅くまで選花作業がつづき、最盛期には徹夜することもある。

「カーネーションを始めて2年目に、(栽培を)なめてしまい失敗した。翌年、気を取り直して、いいものが出来たときはうれしかった。祈る気持ちになれたですね」(耕さん)

と、園芸の妙味を少しずつ体得しつつある。「親戚や友人に花を贈って喜ばれるのが励み」と、笑顔を見せる。

我妻さん夫婦は、町内の新規就農者第1号。花卉生産額全道一の月形町では今年、自治体が「新規就農実習農場」を開設した。栃木県からやってきた20代の夫婦が研修中だという。

5年目にしてやっと落ちつき、当面の目標は経営を軌道に乗せること。

「変わった農業じゃなく、普通の農家をやりたい。本州では、この面積でも大農家。いまの圃場のなかで規模をもう少し拡大して、早くまわりの農家と肩を並べたい」

と、着実な経営をめざす。我妻さんが着目した園芸は、新規入植者が手がけやすいやり方として、関係者の注目を集めている。

求められる柔軟な支援策

道農政部の調査によると、70年から昨年までに農外からの新規参入者は461人にのぼり、関東・近畿の大都市圏出身者が約3割を占める。最近、新規就農者に奨励金の支給や借入金の利子補給などを行う自治体が増えており、その数も30市町村近くにのぼる。

さまざまな優遇措置が盛られているが、「その町の平均規模以上での営農開始を対象とするケースが多く、小規模でも個性的な経営は適用になりにくい」という新規就農者の声もある。

道の施策は、農業青年人材銀行によるPR活動や相談業務、研修事業が2本柱。「最終責任は各地域にもってもらう」が方針という。道農政部農業改良課の加藤和彦主査は、

「平均規模以下でも市町村ごとの経営類型に合えば、画一的でない対応ができるよう変わりつつある。今後は、いろんなケースが出てくるだろうが、地域に魅力がないと、制度だけでは人がこないのでは…。道では、研修センター的なものを地域ごとに整備したい」

と、研修面のサポートを強調する。

高齢化などで引き取り手のない農地が増える一方で、生産一辺倒でない暮らしを求める都市生活者がいる。地域の活性化を図ろうとするなら、多様なニーズに柔軟に対応できる支援策が必要だろうし、入植者たちの歩みや農業観は、多くの示唆を与えてくれる。

●　●

前号、中標津町の蓮見さんの名前は成尋(なるひと)さんでした。訂正します。